

思い返せば、立ち止まることの多い学生生活を送って来たと思います。

私は小学生の一時期に支援学級に通っていました。クラスメイトとのトラブルが絶えず、それを見かねた当時の支援学級の先生が声をかけてくれたのがきっかけでした。支援学級の隣が図書室だったため、授業には参加せず、図書室で司書の先生と一緒に過ごしていることが多かったです。保健室登校ならぬ、図書室登校をしていました。その後、一念発起し、中学受験をして私立の中高一貫校に進学しました。しかし、中学 1 年の夏前から学校に行き渋るようになり、夏休み明けからはとんと学校に行けなくなりました。理由は様々ですが、学校生活に馴染めなかったこと、勉強や部活で疲れ切ったこと、人間関係で悩んだことなどがあります。私立中学を半年程で辞め、公立中学に転校すると同時にフリースクールに通い始めました。そしてその後、茎崎高校の午後部に進学しました。

茎崎高校に進学した理由は、登校時間が選べることと、クラスの人数が小規模であったことが理由です。これは午後部を選んだ理由にも当てはまります。高校 1・2 年では、人嫌いとか朝起きられないことが続き、学校生活に慣れることで精一杯でした。私は 3 年間での卒業を目指していたため、午前の授業も履修していました。そのため 3 時限からの授業といえども、朝 10 時に登校するのがつらかった記憶があります。何度も先生方とぶつかり、親と揉めたことを覚えています。幸いなことに成績は良かったです。テスト範囲が 2 週間前に発表されるため、その期間でテスト範囲の教科書を何度も読み返し、配布される対策プリントを多い時で 20 回は解きました。また、2 年次では、茎崎高校の代表として高校生活について発表したこともありました。一見順調に思えますが、気づかぬうちに疲れが溜まっており、その後、約 3 週間登校できない日々が続いてしまいました。単位数が少ない科目は、落とす寸前でした。成績も下がり、ますます登校への意欲が低減していきました。しかし、幸福なことに、友達には恵まれていました。心配して連絡をくれたり、登校した際には駆け寄って来て励ましてくれたりした友達がいました。小・中では親友と言える程の友達がいなかったため、これは私にとってとても嬉しいことでした。友達がいたから高校を 3 年間で卒業できたと言えます。

3 年次に進学してからは、進路について嫌でも考えるようになりました。もともと大学進学を考えていたため、進路相談や進路見学会の際には、大学のブースを選んで参加していました。当時は大学進学を考えていた生徒が少なかったため、私の他に二人ほどこしか大学の説明会には参加していませんでした。その時の私は学びたいことが定まっておらず、希望大学は家で通える範囲で考えていました。“学びたいことが決まっていないのでは、大学で学ぶことは難しい”と、当時来校していた某大学の教員に言われたことを覚えています。でも、人生 20 年も生きていないのに、これからの進路を自分で決めろと言うのは無理があるなと思います。そのため、できるだけ早めに社会に触れ、世の中の仕組みを体感することが必要だと思いました。バイトなどが最適解かもしれませんが、当時の私はバイトをしていなかったため、新聞やネットニュースでなるべく知るようにしていました。その後、自分の過去を振り返り、障害児教育について学びたいと思いました。そして、第一希望の大学を決めてからは、多くの先生方に協力してもらい、推薦を獲得して挑戦することにしました。推薦試験は、英語科目、障害児教育に関する論述問題、面接試験でした。早く登校することが依然として難しかったため、授業終了後に学校に残り、先生に勉強を教えてもらうと同時に、特製のプリントを作ってもらい、それを家で繰り返し解いていました。英語は英語の先生に、論述は現代文の先生に、面接は校長先生・教頭先生をはじめ、合計で 15 人の先生方に協力してもらいました。高校の授業レベルとはかけ離れた難しさだったため、必死になってインプットとアウトプットを繰り返しました。ドキドキの受験結果は、不合格でした。試験本番に顔色が無くなる程緊張していたこともあり、実力を出し切れなかった後悔が今でもあります。試験慣れをしていなかったことが、最大の敗因だと考えます。ここからまた、大きなどん底を迎えました。受験に失敗したショックと過度な疲れ、進路選択が白紙になったことなど、精神的負担が重なり、自分の人生から色が消え去りました。具体的なことは書けませんが、これまでにない大きな過渡期でした。物語の世界でよく見る“全てがどうしてもよくなる”とは、このことを言うのかと感じてました。しかし、学校には登校し続け、高校は無事に卒業しました。一種の悟りを開いたような状態だったと思います。気がついたら卒業していました。この時点で、進路は決まっていませんでした。

高校卒業後、2ヶ月の休養を経て、日本大学の通信教育部（以後、日大通信とする）に進学しました。日大通信は入学試験がなかったため、書類を出すだけで進学できました。専攻は、障害児教育の次に興味があった、英語学を学ぼうと考え、文理学部文学専攻（英文学）に入学しました。時期は既に5月であったため、履修期間はとうに終わっており、大学1年時の前期では制度上履修できる数科目のみを受講しました。後期からは、コロナ渦で在宅学習が原則であったこともあり、通常では難しくらいの量の講義を受講し、1年で取りきるべき単位数を半年で取りました。日大通信の基礎科目（1・2年次）は、キャンパスへの登校がほぼ必要なかったため、動画を見て、レポートを書いて単位を取りました。2年次の後期からは在宅で取れる科目が少なくなってきたため、週に1回のペースで東京の市ヶ谷にあるキャンパスに通いました。東京に1人で行ったことが無かったため、その日はとても緊張していました。加えて、それまでオンラインで授業を受講していたため、会う人は全て初対面の人であり、グループワークがある日は毎回お腹の調子を崩していました。でも、慣れですね。3年次からはコロナも落ち着き、教職課程も履修し始めたため、ほとんどの単位を対面で取る必要が生まれました。週に3~4回のペースで市ヶ谷に通い、2か月に1回で土日終日の講義を受けました。終日の講義は、朝9時から夕方6時までであったため、朝が苦手な私は近くのビジネスホテルを予約して通いました。卒業論文の指導が始まったのもこの時期からでした。3年次の終わり頃には、徐々に顔見知りも増え、仲良く話せる知り合いが数人できました。相変わらずグループワークは苦手でしたが、翌年には教育実習があるため、自分の体調を鑑みながら、なるべく多くの人と話すようにしました。学食などがなかったため、お弁当と一緒に食べたり、休み時間に休憩スペースで雑談をしたりしました。日大通信は年齢層が高いので、お兄さん、お姉さん、あるいは祖父母と話している感じでした。最終学年である4年次になった年には、いよいよ教育実習に向けて準備がはじまりました。これまで英語という「言葉」（英語学）について勉強していたため、英語を教えることには大きな不安がありました。必死になって教育書を読み、授業のイメージトレーニングも行いましたが、現場では納得いく授業ができませんでした。当時担当した生徒達ともあまりうまく関わっていなかったのではないかと思います。しかし、この教育実習が大きな発想の転機になりました。英語学も面白い学問分野ですが、どのようにしたら英語を教えられるのだろうか、どのように教えれば生徒は楽しんで英語を学べるのだろうかという疑問が生じ、「英語教育」の道に惹かれ始めました。そして選んだのが、大学院進学です。

大学院進学は、大学受験と比べて、特に文系では過酷な試験対策は必要ありませんでした。私の受験先は、教員採用試験に似た筆記試験と専門科目（英語教育）の論述、面接が試験内容でした。事前に何を学びたいかをまとめた研究計画書の提出が必要だったため、卒業論文を見てくださった大学の先生にお願いし、添削をしてもらいました。人前で話したりする場数は大学で踏めていたため、試験当日は落ち着いて解くことができました。面接ではかなり突っ込まれたことも言われましたが、無難に応えました。そして、無事に筑波大学大学院、教育学学位プログラムに合格することができました。筑波大学こそ、まさに私が高校3年生で失敗した第1希望の大学です。大学院での生活は、講義こそ大変ですが、充実したキャンパスライフを送れています。多くの友人と知り合え、私のことを理解してくれる貴重な先輩、同僚、教員と会うことができました。飲み会をはじめ、カラオケ、筑波山登山、ビリヤードなど沢山遊び、講義での発表やゼミ、研究発表など多くのことを学んでいます。さらには、念願であった留学にも行くことができました。大学院1年（修士1年）の夏にカナダに3週間行き、冬にはニュージーランドに6週間行くことができました。初めての海外一人渡航は、信じられないほど緊張して不安でしたが、留学先では決して忘れることのできない体験を多くできました。日本の社会はわりと型にはまった、と表現するのはやや恣意的ですが、伝統を過度に重んじる風潮があります。しかし、海外では全く異なります。人々はみんな自由で、他人よりも自分を優先します。思いやりが足りないと感じることもありましたが、当人はとても幸せそうでした。これは大切なことだと思います。私は昔から他者に対して過度に意識を向けすぎることがあったため、留学先での異文化交流は大きな変化を私にもたらししました。ニュージーランドでは、同じ大学の友達と二人で国内旅行をし、氷河、オーロラ、絵画の様な荘厳な景色に満たされました。もちろん、勉強もしました。でも、授業に出て英語で問題を解く・話すことだけが勉強じゃないんですね。旅行先でトラブルに見舞われ、英語で話して解決し、自分の足と手と頭

をフルに活用して楽しむことも貴重な勉強だと思います。拙い英語でも、こちらの熱意が伝われば相手は聞いてくれます。特にニュージーランドの人々はとても優しいため、初めての留学にはお勧めの国です。とても伸び伸びと過ごしている人が多いため、5人に1人が裸足で町中を歩き、Take it easy（「楽にこう」）を合言葉に生きています。

今、とても充実した大学院生活を送れています。しかし、これまでを振り返っても分かるように、この先に大きな過渡期が待っているかもしれません。その時は、また立ち止まることもあるかもしれません。けれども、過去の過渡期を何とか乗り越えてきたように、これからも乗り越えていけると思っています。今の私は、これから進路を決めなければいけないため、将来への大きな不安を抱えています。しかし、自信もあります。自分で考えて、体験し、失敗と成功を学んでいく。これで人生は成り立っていると思います。そのため、今の自分を認められなくても、その後、認められる日がくると思っています。そうでも考えないと、やっていけませんので、そう考えています。

みなさんの現在の悩みや失敗は、将来どう捉えられると思いますか。それを考えると人生も捨てたものではないと思えるのではないのでしょうか。